みなと物語

港区と西区の境界、謎の4車線道路～境川運河

みなと通を東へ進むと、境川交差点（西区）の少し手前で、中央分離帯のある片側2車線の道路が左から交わります。4車線もある道路ながら、みなと通との交差点には信号がなく、交差点から右の方は緑地帯になっています。港区と西区の境界になっている、交通量の割には広いこの道路は、もとは境川運河という水路でした。

境川運河に架かっていた境橋
（大正11年、郷土出版社刊
「目で見る大阪市の100年」より）

築港工事が始まった明治30（1897）年、現在の港区は見渡す限りの新田で、交通路と呼べるものはほとんどない状況でしたが、同年に大阪運河株式会社によって新しい運河の開削が始まり、明治35（1902）年、境川運河が完成しました。幅36m、延長約1.5kmに及ぶ運河の開通により初めて安治川と尻無川がつながり、水運が資材輸送手段の主役であった当時の産業経済に大きな役割を果たすことになりました。運河の両岸には材木商や鉄鋼・機械等の工場が進出し、たいそう賑わいました。

昭和30年頃の境川運河
（「港区誌」より）

戦前の港区は築港の繁栄とともに、市内最大を誇るほどに人口が増加し、このため昭和18（1943）年、区域の一部を西区へ分割することになったとき、境川運河が西区との新しい境界とされました。

戦後も境川運河は残り、両岸には防潮堤も整備されましたが、物流が水運から陸運へ移行し、環境問題等により沿岸の工場の多くが他に移転したことにより、運河の利用は減少していきました。そして、土地区画整理事業における抜本的な高潮対策として昭和39（1964）年に埋め立てられ、姿を消しました。

現在の境川運河跡。平成22年3月、大阪港ライオンズクラブが市民の皆さんにも賛同者を募ってサクラ100本を植樹、「桜阪（おうさか）ロード」と名付けられました。